【研究ノート】

# 「オデュッセイア」におけるテレマコスの帰国

松本仁助

## I

「オデュッセイア」一三歌の末尾において、イタカに帰着したオデュッセウスにアテネは、彼の館の状況を説明した後、彼の息子テレマコスをスパルタにむかえにいくと述べる(一三、三七四―四四〇)。そして一五歌のはじめでメネラオスの館へアテネはいき、ペイシストラトスが眠っているのに父オデュッセウスのことを心配して眠れずにいるテレマコスに、「テレマコスよ、財産や乱暴狼藉な男ども(ペネロペイアの求婚者たち)を館にのこしたまま、故郷から遠くはなれてさまよっていてはいけない。彼らが財産をすべて分配して食いつくし、おまえは無駄に旅をしたことになるだろう。おまえが尊い母に館でまだ会えるように、大音声のメネラオスに送りだしてくれるようただちに頼むがよい。おまえの母の父や弟たちは、エウリュマコスがすべての求婚者たちよりずっと多くの贈物をし、結納の額をふやしつづけているので、彼と結婚するようにとおまえの母にすすめている。それに母はおまえの意向を無視して家から物をもちだすだろう。人妻の心とはどんなものか、おまえは知っているだろう。人妻とは、彼女を自分のものにしたその男の家を豊かにしたがるが、前の子供たちや、愛する夫のことも、その夫が死ねば、もう思い出しもせず、尋ねもしないものなのだ。だがおまえ自身が帰国すると、神々がお

まえに立派な王妃の姿をしめすまでは、もっともよいと思われる女中を信頼して一切のことをまかせるがよい（一五、一〇―二六）」と言って帰国を命じている。[1] このあとひきつづき、アテネは、「わたしはもう一言おまえに言っておきたい。そしておまえは、このことをよく心にいれておくのだ。求婚者たちのうちのもっともすぐれた者たちが、イタカと山のけわしいサモスの間の海峡で待伏せし、おまえが帰国する前におまえを殺そうと企らんでいる。だが、わたしはそうはならないと思う。その前に、おまえの財産を食いつくしている求婚者たちの多くを大地がおおうだろう。それ故、立派に造られた船を島々から遠くはなし、夜も航行するがよい。不死の神々の誰かが、おまえのためにうしろから追風をおくり、おまえを護って助けてくれるだろう。しかしイタカの突端の岸に着けば、船とすべての乗組員を町へむかわせ、おまえ自身は、まずおまえの豚を見張り、いつもかわらずおまえに好意を寄せている豚飼いのところへいくのだ。そこでおまえは、夜をすごし、彼を町にいかせ、聡明なペネロペイアに、おまえが無事にピュロスから帰ってきたという報告をさせよ（一五、二七―四二）」と帰国についての注意を与えている。

以上のアテネの言葉によって、翌朝テレマコスは、メネラオスにただちに故郷へ送り返してほしいと頼み、これにメネラオスも同意し、贈物を与え食事をさせたあと、ヘレナとともにテレマコスとペイシストラトスを送りだした（一五、四二―二二一）。そしてスパルタを出発したテレマコスは、ペライのディオクレスの館で一夜をすごし、翌日まっしぐらにピュロスにむかい、ついにピュロスに到着する。しかし彼はピュロスでネストルにあわず、ペイシストラトスが彼の伝言をネストルにつたえることにして乗船する。こうして彼は、ピュロス[2]から出帆することになったのである。

ところでテレマコスのとった航路は、つぎのように述べられている。「輝く目のアテネは、ひじょうに速く船がすすみ、塩の海をわたって航海をおえるようにと、彼らのために晴れた空をはげしく吹く追風をおくった。こ

うして彼らは、クルノイと美しい流れの地カルキスを通りすぎた。太陽は沈み、すべての道が闇におおわれると、船はゼウスの追風をうけてペアイに近づき、エペイオス人が支配する聖なるエリスにそってすすみ、そこを過ぎると死からのがれるか、死にとらえられるかと気づかいながら、尖った島々に船をむけた（一五、二九二―三〇〇）。」そしてこのあと場面は、イタカに変っている。

## Ⅱ

Ⅰ章で一五歌の前半、すなわちテレマコスのスパルタ出発からイタカへの帰国途上まで紹介した。テレマコスのスパルタ出発の場面については、矛盾が指摘されているが、これに関しては、統一論的立場から別に述べる予定である。ここでとりあげたいのは、テレマコスが帰国のためにどのような航路をとったかということ、またこのことから彼の故郷イタカの位置および彼の下船した場所などを知るための手がかりが得られないかということである。

ところでアテネは、テレマコスに「立派に造られた船を島々から遠くはなし（hekas nēsōn）、夜も航行せよ（一五、三三―三四）」と航路と航海の仕方を指示している。だがこの航路は、具体的にはどの航路をさしているのだろうか。テレマコスのとった航路は、Ⅰ章にあげた一五、二九二―三〇〇においてより具体的に述べられている。そこではクルノイとカルキスを通りすぎ、夜になるとペアイにちかづきエリスをすぎると尖った島々へと船をむけたとなっている。すなわちテレマコスは、エリスまでペロポネソスの西岸に沿って航行し、そこから岸をはなれて尖った島々へとむかったのである。

ところで一五、二九九の「尖った島々へ（nēsoisin thoēsin）」とは具体的にどういう島々をさしているのであろうか。さらに「島々から遠くはなれて（一五、三三）」とは何を意味しているのであろうか。まずここで言えることは、三三の島々と二九九の島々が、違った島々をさしていることである。三三の島々とは、イタカおよびイタカ近隣のドゥリキオンとサメさらに森深いザキュント

スの島々（一、二四六、九、二四、一六、一二三、一九、一三一）のことを言っていると思われる。そして「これらの島々を遠く離れて夜も航行せよ」というアテネの助言は、テレマコスが旅立ったことを知った求婚者たちが、イタカとサモスの間の海峡で（四、六七一）待伏して帰国するテレマコスを殺害しようと、明るい間は高所で見張りし、夜は船で海上を哨戒している（一六、三六五―三七〇）故、彼らに見つからないようにこれらの島々から離れるために、ペロポネソスの西岸にそって夜も航行するように（一五、二九二―二九八）という意味にとれば、具体的で、しかも不自然でないだろう。

では尖った島々とは、どの島々なのであろうか。モンローは、「彼（テレマコス）は、死をのがれられるか、とらえられるかと心配しながら（一五、三〇〇）」と述べられている点に注目し、尖った島々（一五、二九九）は、イタカをさしており、テレマコスは岸からはなれると夜の間はイタカへ直行したのであって島々と複数になっているのは、近隣の諸島を含めて言われているのだと見ている。[3] しかしイタカおよびサモス、ザキュントスなどの大きな島々が尖った島々と言えるだろうか。しかもこれらの大きな島々のうちで一番小さなイタカが、これらの島々を代表し得るのだろうか。したがってモンローの見方は、不自然に思える。

これに反し、ストラボンは、エリスの岸をはなれて北に向かい、それから東へむきを変えたと見ている。すなわち、船は、はじめイタカへ直行しようとしたが、求婚者たちがイタカとサモスの海峡において（四、六七一）待伏せしていた故、それからまた尖った島々へ進路をとった（一五、二九九）のであり、作者は thoai というのは尖ったという意味にとっていたと、ストラボンは見なしており、これらの尖った島々はエキナデス諸島の一部を形成しており、コリントス湾入口、アケロオス河口に位置していたと言っている。そしてストラボンは、テレマコスはイタカのはるか南を通過した後、進路を北にとり、イタカの東側に上陸したと見ているのである。[4] 以上のストラボンの見方のほうが、モンローより自然である

ように思える。

だがストラボンが、テレマコスがエリスの岸からはなれて一度北上し、それから求婚者たちの哨戒をさけて尖った島々へむかって東航したと説明している点、またイタカのはるか南方を通りすぎると北上し、求婚者たちの哨戒をのがれてイタカの東岸に上陸したと述べている点に、納得しにくい面があるようである。というのは、テレマコスは、一五、三三において「島々から遠くはなれて」とアテネからすでに助言をうけているのであるから、エリスの岸からはなれて航行していく場合も、当然イタカおよび近隣の諸島からはなれ、求婚者たちの哨戒（一五、二八―三〇）を避けることを忘れていなかったと見るべきだろう。またエリスをはなれて尖った島々であるエキナデス南部の諸島すなわちオクセイアの方向[5]へ直行することは、同時にイタカの島々とペロポネソス北岸の中間の海上を航行することになる故、ストラボンのような一旦北上してから、求婚者たちの哨戒を恐れて東方にむかったという説明よりもエリスをはなれるとただちに東方へ航行したと見る方が結果的に求婚者たちの哨戒を避けることになり、自然なのではなかろうか。さらにテレマコスの上陸地点を、ストラボンは、ただ東岸としているだけであるが、はたして東岸なのであろうか。さらにもし東岸とすれば、そのどの地点に上陸したのかなどが疑問になるのである。

ところでテレマコスは、イタカに到着すると、彼だけが忠実な豚飼い（エウマイオス）のところへいき、船と乗組員を町へいかせるよう（一五、三六―三九）アテネに指示されていたのである。それ故彼は、エウマイオスの小屋にいけるところに上陸しなければならないわけである。すると彼は、エウマイオスが今のマラシア高原に住んでいたから（一四、一―四）、イタカの最南端にある港現在のアンドリに上陸したと見ざるを得なくなるだろう。[6]事実彼は、アテネの指示どおりの行動をとったようである（一五、四九五―五〇七）。このように見てくると、テレマコスは、ストラボンのいうような航路をとったのではなく、エリスからオクセイアの方に直行し、イ

タカの南方から北東へ進路を転じて、現在のアンドリの港に上陸し、自分はエウマイオスのところへいき、他の者たちは船で町へいったと見るのが妥当であろう。[7] なおテレマコスは、エウマイオスに会ったあと、自分の帰国をしらせに彼をペネロペイアのところへいかせ（一六、一三〇―一三四）、翌日彼自身が館に帰りペネロペイアに再会している（一七、四一―六〇）のである。もちろんその間に、オデュッセウスの帰国、オデュッセウスとエウマイオス、オデュッセウスとテレマコスの再会がなされているが、それらについては別に述べることにする。

## Ⅲ

Ⅱ章におけるテレマコスの帰国に関する説明は、「オデュッセイア」のイタカが、現在のイサキであることを前提としていることは言うまでもない。またこの前提の故に、Ⅱ章においてテレマコスの帰国は、比較的無理のない説明ができたと言えるだろう。ところで、ここで本題からそれるが、現在のイサキがはたして「オデュッセイア」のイタカであるかどうかをさらに検討してみようと思う。というのはイサキが「オデュッセイア」のイタカでないという異説があるからである。この異説をとなえた学者はデルプフェルト[8]であり、その説の根拠になっているのは、オデュッセウスがアルキノオスに自分の故郷を述べている箇所（九、二一―二七）である。とりわけストラボンにより九、二五―二六を根拠にして、イタカは、海では本土に接近し（chthamalē）、（本土の）もっとも西に（panupertatē pros zophon）にあると解釈されている点がデルプフェルトに重視され、イサキは、本土の「もっとも西にある」とは言われ得ず、レフカスがそう言われ得る故、「オデュッセイア」のイタカは現在のレフカスであり、サメが現在のイサキ、ドゥリキオンが現在のケファリニアになると主張されている。

デルプフェルトは、自分の説が正しいことをしめすために、ストラボンの説に反対して、現在のレフカスがホメロス時代には島であったことを証明しようとした。だ

が彼の説がうけいれられるかどうかの決め手は、むしろレフカスが、「オデュッセイア」におけるイタカの描写と一致しているかどうかによると言えるだろう。

オデュッセウスは、イタカの「まわりには、たがいに近く多くの島、ドゥリキオンにサメ、森深いザキュントスがある(九、二二―二四)」と述べているが、それらの島々がレフカスの周囲にあるとは言えない。また「イタカと岩の多いサモスの間の海上に、アステリスという岩の小島があり、船を泊める二つの港をもっていた。そこでギリシア人たちがテレマコスを待伏せしていた(一五、八四四―八四七)」と述べられているが、イサキと現在のレフカスの間の海を海峡とは呼べない。だがイサキとケファリニアの間の海はあきらかに海峡であり、その海峡の北にあるザスカリオといわれる岩の小島は、一般にホメロスのアステリスと見なされている。しかしレフカスには、アステリスにあたる島がない。デルプフェルトは、現在のアルクジをアステリスと見なしているが、イサキとレフカスとの間に位置しているとは言えない。さらにテレマコスがメネラオスから馬を贈ると言われたとき、「イタカには牧場も、馬を駆る広い道もない。だがその土地は、山羊を飼うには適していて、馬を飼うに適している土地よりも私にはこのましいのです。その海にあるどの島も、馬を飼うに適せず、牧場にもむいていないが、とりわけイタカはそうなのです(四、六〇五―六〇八)」と答えている言葉、「岩だらけだが、すぐれた若者を養うのに適している(九、二七)」と言っているオデュッセウスの言葉、「土地は険しく、馬を駆るにはふさわしくなく、狭いが、とくに貧しいのではない(一三、二四二―二四三)」と、イタカに関して、アテネが、パイアクス人に運ばれてきたオデュッセウスに説明している言葉などと、テレマコスの帰路をあわせ考えると、ホメロスのイタカは、現在のイサキと見なしてよいのではなかろうか。[9]

**注**

① 「自分の両親も結婚するように熱心にすすめるし、息子も彼の財産を消尽されるのを知るようになって怒っている(一

九、一五八―一六〇」という言葉から、この場面のアテネの言葉一五、一六―一七が、テレマコスを早く帰国させるために事実をまげて言われているのではなく、おそくとも二歌の集会以後、求婚者たちがペネロイペアの実家に求婚しだしたと見ることもできる故、アテネはテレマコスに事実を述べていると見ることができよう。Cf. U. v. Wilamowitz, Die Heimkehr des Odysseus, Berlin, 1927, 137 ; F. Focke, Die Odyssee, Stuttgart-Berlin, 1943, 11 ; H. Eisenberger, Studien zur Odyssee, Wiesbaden, 1973, 92.

② このピュロスは、テレマコスがスパルタを出発した晩にペライに着き、翌日この地に着いて乗船し、アテネに犠牲を捧げて出航し、エリスの岸に沿ってすすみはじめると陽が沈んでいるようであるから、メッサニアのピュロスで、現在エガリオン山のふもとにあるエパノ・エングリヤノスといわれるピュロスと見るべきであり、現在トリフリヤのカコヴァトスといわれるピュロスやエリスのピュロスとは見られないだろう。なお現在コリファシオン、トラガニスといわれるところも、ピュロスといわれているが、考古学的発掘や、三歌と一五歌の場面から見てエパノ・エングリヤノスが、ネストルのピュロスである可能性がもっとも大きいと思われる。Blegen, Pylos, 422f., A Companion to Homer ed., A. J. B. Wace and F. H. Stubbings, London, 1962.

③ P. B. Monro, Homer's, Odyssey XIII-XXIV, Oxford, 1901, 58, commentary 15, 299-300; cf. Focke, 14f.

④ The Geography of Strabo translated by H. L. Jones, London, 1968, 8, 3, 26; cf. Stanford, 252, commentary 15, 299.

⑤ Stanford, 252, commentary 15, 299 ; cf. F. Bechtel, Lexilogus zu Homer, Hildesheim, 1964, thoos.

⑥ Stubbings, 414 ; R. E. 2293 ; Die blauen Führer, Paris, 1963, 548f.

⑦ ロリマーは、テレマコスがエキナデスの方面から北西にむかって進み、アテネの指示どおり求婚者たちの哨戒をさけて、イタカの一番はしに到着したとすれば、現在のアイオス・ヨアンニス岬に上陸してエウマイスのところへいき、船と他の乗組員は、イサキ島の東側を北上し、島の北側を迂廻して現在のポリス湾に着いたと見ており、アンドリ港に上陸するのはより危険であると見なしている H. L. Lorimer, Homer and the Manments, London, 1950, 500f. しかしロリマーも認めているように、アンドリ港に上陸するほうが自然であり、夜あけに陸地に着いているのであるから危険はさけられたと思われる。一方、船もそこから島の西側を北上してポリス湾にはいったと見てもよいだろう。イサキをイタカと見なしている者たちは、一般に、テレマコスがアンドリ港に上陸したと見なしているようである。Cf. Stubbings, 404 ; Die blauen Führer, 550.

⑧ W. Dörpfeld, Alt-Ithaka, Berlin, 1930 68ff. ; Strabo, 10, 2, 12.

⑨ 「オデュッセイア」におけるイタカに関するもっとも重要であり、しかも非常にわかりにくい描写は、九、二一―二七である。この描写の理解しにくい点については、すでに古代の註釈家たちが感じていたところである。とくにストラボン(Strabo, 10, 2, 12.) は、九、二一―二七について註釈し、かつ古代の註釈家たちの見解にも言及している。それ故、ストラボンの解釈をまず見て見よう。というのもイタカに関する近代の説も大体ストラボンの解釈によっているからである。ところで九、二一―二七では、つぎのように述べられている。「わたし（オデュッセウス）は、遠くからよく見えるイタカの住人で、そこには、木の葉をそよがせ、高くそびえる山、ネリトンがある。周囲には、多くの島々がたがいに近くよこたわっている。それらの島々はドゥリキオンにサメに森におおわれたザキュントスである。だがイタカそのものは、海上に低く、闇にむかってもっともかなたにあり、他の島々は、イタカからはなれて朝と太陽にむかってよこたわっている。イタカは険しいが、男たちを立派に育てあげるには良い土地だ（シャーデヴァルト翻訳参照）。」

この描写によると、イタカは四つの島のうちの一つであり、他の三つは、ドゥリキオン、サメ、ザキュントスであることがわかるだろう。ところでジョーンズがストラボンの記述をもとにして作成した地図（Strabo, IV, Map VIII.）によると、イタカ、ケパレニア、ザキュントス、レウカスが、この四つの島にあたるのではないかと思われる。だがストラボン(Strabo, 10. 2. 8.) は、レウカスをこの四つの島にいれていない。というのも彼は、レウカスは、古くはアカルナニアの半島であったが、コリントス人たちが北の地峡に運河をつくったときに島になったのであり、それはキュプセロスの頃つまり紀元前六〇年頃のことと見なしているからである。

またストラボンは、レウカス以外の三つの島のうち、二つの島イタカとザキュントスを現在のイサキとザンディと同一視し、サメを現在のケファリニアと見ている。しかし残りの一つの島ドゥリキオンが問題なのである。彼は、「イリアス」二歌における軍船のカタログが、ドゥリキオンをメゲスが支配している一方、オデュッセウスがケパレン人たちを指揮していると記している（二、六二五、六三一―六三四）点を根拠にして、ドゥリキオンをエキナデスの島の一つで、当時のドリカ、現在のイニアゼに面し、アヘルゥスの河口にある島と見ている。

ところがここでさきにあげた「オデュッセイア」九、二一―二七におけるイタカの描写、とりわけ九、二五に記されている「低く(chthamalē)」と「もっともかなたに(paunpertatē)」が、また問題となるのである。ストラボンは、この事実と矛盾する二つの形容詞について、古代の註釈家と思われる者た

ちのほうがうまく説明していると述べている。すなわち彼らが、chthamalē を「本土に接近して」と、panupertatē を pros zophon と結びつけて、「北にむかってもっともはなれ」と解する一方、pros ēōt' ēelion te を「南にむかって」と解しており、この見方をストラボンは支持し、その裏づけとして彼は一〇、一九〇―一九二を引用している。この箇所はキルケの島の描写の一部であるが、つぎのように述べられている。「皆の者、俺（オデュッセウス）には、どこが闇（zophos）でどこが曙（ēōs）で、光をもたらすヘリオスが、どこで大地の下に沈むのか、彼がどこでまた昇ってくるのかわからない。」ここでストラボンは、zophos を北、ēōs を南、ヘリオスの沈むところを西、昇ってくるところを東と解し、ここで北、南、西、東の順序で方角が言われており、東西南北にあたるギリシア語の表現があきらかにされていると見ている。それ故彼は、九、二五―二六を、「イタカそのものは、本土に近く(chthamalē)もっとも北にはなれて(panupertatē pros zophon)海上によこたわり、他の島々は、イタカからはなれて、南にむかって(pros ēō t' ēelion tē)よこたわっている」と解しているように思われる。これは一見、首尾一貫した解釈のようであるが、はたして問題はないのだろうか。

まず chthamalē という語の意味であるが、ストラボン自身が、うまく解釈していると言っているように、あまり説得力があるとは思えない。chthamalē は、一〇、一九六にもある。そしてこの語は、キルケの島の高所から島をながめたときの描写に使用されている形容詞である。したがって九、二五と一〇、一九六のまったくおなじ句の部分が、ともにストラボンの支持する「本土に近く」という意味を持つことは不可能であろう。とすれば九、二五の chthamalē は、一〇、一九六におけるように「低い」という意味にとるべきだろう。

だが現在のイサキは、低くよこたわっている島ではなく、急勾配の海岸線をもった山の多い島であり、イタカにつけられた形容詞も「岩の多い」「峨々たる」というものである。ところでベラール（V. Bérard, Les Phéniciens et l' Odyssee, Paris, II. 1903, 412）は、イサキは、南あるいは南東から見ると、高い山を持ったケファリニアとくらべて低く見え、古代のギリシア人も、イサキをこの方面からよく見たものであり、それ故九、二一―二七も、この方向から描写されたのだろうと推測している。このベラールの推測をうけいれると、イサキとギリシア全土との関係からして、イタカの位置を「闇（すなわち西あるいは北西）にむかってもっとも遠くはなれて」というのは、不自然なことではないだろう。だがここでケファリニアは、おなじように遠い、いやもっと遠いと異議をはさめるかも知れない。しかし南東から見ると、やはりケファリニアはイサキよりもっと南よりであり、ギリシアからはいきやすいと言えるだろう。したがって「朝と太陽にむかって(pros ēō t' ēelion te)」というのも、「東

と南にむかって」という意味に解釈できることになってくるのである。つまり東の方にあるのはドゥリキオンであり、南にあるのは、ケファリニアとザキュントスすなわち現在のザンディと見ることができるだろう。

なおベラールや他の学者たちは、四つの島がオデュッセウスによって支配されていたと見ている。しかしこのような見方は、「イリアス」二、六二五―六三〇において四〇隻の船隊を指揮しているメゲスによって、ドゥリキオンとエキナデスが支配されていたという記述と矛盾している。またおなじ二、六三一―六三七では、オデュッセウス自身は一二隻の船隊を指揮していると記されている。したがってオデュッセウスが大きな国を支配していたと見る必要もないし、このことが、「オデュッセイア」におけるオデュッセウスの有名さと矛盾していると思わなくてよいだろう。「イリアス」二、五五七では、アイアスのような英雄でも、一二隻の船隊しか指揮していないのである。

さらに「オデュッセイア」一六、二四七―二五一では、ペネロペイアの求婚者たちが、ドゥリキオンから五二人、サメから二四人、ザキュントスから二〇人きているのに、イタカは一四人であると述べられている。このことは、島の大きさをしめしていると見てよいだろう。またドゥリキオンには、「小麦豊かな、緑の草の（一六、三九六）」という形容語句がついている。このように見てくると、ドゥリキオンを現在のどの島と一致させるかということは、なかなかむつかしいことである。

「イリアス」二、六二五において、「ドゥリキオンと神聖なエキナデスの島々の」と記されている。この場合、ドゥリキオンをエキナデス諸島の一つと見ることも不可能ではないにしても、現在のエヒナゼス諸島のどの島も、「小麦豊かで緑の草の」とは言えないだろう。

ベラールは、レフカスの南東にある島現在のメガニシをドゥリキオンと見なしている。この島は、エキナデスすなわち現在のエヒナゼスのどの島よりも大きく、農業に適しているが、そこから五二人もの求婚者たちがこれるか疑問であり、説得力にとぼしい。アレン（Allen, The Homeric Catalogue of the Ships, Oxford, 1921, 86ff.）は、ドゥリキオンをレフカスと見なしている。というのは、レフカスはドゥリキオンの叙述とも一致するし、島国連邦の主要構成部分であったと見なしうるからであろう。そしてこの連邦には現在のメガニシやエヒナゼス諸島、さらには本土の一部もふくまれていたと思われる。またこのような国なら四〇隻の船隊を派遣することもできたであろうし、レフカス＝ドゥリキオンの島なら五二人の求婚者たちが来ることも可能であったろう。ストラボンのドゥリキオンに関する説をくつがえすには、このような解釈が一番適しているのではなかろうか。

Cf. Lorimer, 493ff.; Stubbings, 398ff.; Simpson and

Lazenby, 101; Monro, XIII–XXIV, 321ff.; Stanford, 2. vol. 404ff.; G. S. Kirk, The Songs of Homer, Cambridge, 1962, 248ff.; J. P. Seymour, Life in the Homeric Age, New York, 1965, 69ff.

ところで、オデュッセウスの館は、イサキのどこにあったのであろうか。Ⅱ章で述べたように、テレマコスが、夜明けにアンドリに上陸し、マラシイア高原にあるエウマイオスの小屋にいき、そこでエウマイオスと父オデュッセウスに会ったということ、またテレマコスがすぐにエウマイオスを館にいかせて、自分が帰国したことをペネロペイアに報告させ、エウマイオスも報告をすませるとただちに帰途につき（一六、四六六—四六七）夕方になって帰ってきた（一六、四五二—四五三）ことを前提にすると、オデュッセウスの館はエウマイオスの小屋から相当距離があり、イサキの北部、現在のポリス湾の上方、スタヴロスの近くにあったと推定し得る。なおその傍証として、求婚者たちが、テレマコスを待伏せする拠点としたアステリス（四、八四五）すなわち現在のザスカリオが、イサキ海峡の北方に位置し、しかもその東側にポリス湾があり、その湾にテレマコスを下ろした船が入っていくのをエウマイオスがネイオン山（現在のアノイ山脈）の北部の麓にあるヘルメスの丘から見たこと（一六、四七〇—四七四）、さらに待伏せしていた求婚者たちの船もポリス湾にはいっていった（一六、三五五—三五七）ことをあげることができるだろう。またエウマイオスは、この往復をまる一日でしたが、テレマコスがペライからスパルタへ馬車でタユエトス山の難所を一日で越えて着いたことを思えば、不可能ではなかったと言えよう。もっともこのような難所を馬車で越えるのは非常に困難であるから、現在のトリポリスを通過し北方を迂廻してスパルタに着いたのだろうというふうにも考えられる。Cf. R. E. 2294; Stubbings, 415; Die blauen Führer, 548f.

一方オデュッセウスが、パイアクス人たちに送られてイタカに上陸した地点は、現在のモロ湾からさらに南東部に入り込んだ「ポルキュスの湾」すなわち現在のヴァシィ湾の奥にあるヴァシイ近辺であったと見なされうる。このように言い得るのは、「イタカにおいて、海の老人ポルキュスの湾と呼ばれている湾があった。その湾では、二つの陸地が、海の方へむかっては、険しい岬となって突出しているが、湾の方にはなだらかな傾斜になっていて、外からの激しい風による強い大波を防いでおり、内においては、よい甲板の船は、投錨の地点につくと、綱なしに安全に碇泊できる。湾の奥には一本の長い葉のオリーブの木があり、その近くにはネイアデスと呼ばれるニンフたちの快適で薄暗い聖なる洞穴があった（一三、九六—一〇四）」という描写があり、とりわけ九六—一〇一の記述が、現在のヴァシイ湾に一致していると思われるからである(cf. R. E. 2295; Stubbings, 416; Die blauen

Führer, 548)。また一〇三―一〇四のニンフたちの洞穴も、ヴァシィの西、現在のマルマロスピリアにあると言われ、この点でもかなりの一致点が見出せる。したがってネリトンの山(九、二二、一三、三五一)も、ヴァシィから西に見える現在のメロヴィグリィ山と思われる。なお島の西にコラクス岩とアレトゥサの泉(一三、四〇八)が、現在のペラピガジイ近辺にあり、またそのあたりに、つまり本文において述べたようにマラシイア高原に、エウマイオスが小屋をもって住んでいたと見なし得る。またラエルテスの農園(二四、二〇五―二一〇)は、現在のエヒ山の麓にあったと思われる。(Cf. R. E 2294f.; Lorimer, 1950, 500f.)